速見郡塚原霧島神社の甘酒祭

半田康夫

霧島神社は大分県速見郡湯布院町塚原に鎮座し、イザナギイザナミ二神を祭神としている。宝暦六年の同社の「祭祀記録」には「霧島明神男能濃松社」とあつて、オノノマツ社ともよばれたようである。その十二月九日、十日の祭は、甘酒祭、冬祭、霜月祭などとよばれるが、「霧島神社例通帳」という宮座記録に、

天明二年十一月初卯辰日　宮座　安右衛門

天明三年十一月卯辰日　宮座　徳兵衛

云々と記されているように、古くは霜月の初の卯の日と辰の日の二日間にわたつて執行されたのである。卯の日が、今と同様にヨド（ヨイマツリ）であつたに違いない。

塚原部落（旧塚原村）百余戸は、カサ（上）、ゼミセ（出店）、尾下、井上、シモ（下）、ムカイ（向）の六組に分かれているが、当社の氏子としては、カサとゼミセ、尾下と井上とがそれぞれ一組となつて、都合四組の宮座を形成し、一年交代でマワリコ（順番）にウケグミ（受組）となる。ウケ組の中心となる頭人をザマエとよび、ウケ組のうちの希望者中最年長者に依嘱することになつているが、かなりの出費を要するので、裕福な者でなければ勤まらない。ザマエの家の戸口と木戸口には祭の期間中カドシメが張られる。

ザマエのほかに、明治三十一年の「村社祭典諸事記載帳」によると、受組のヨリコ（ザマエ以外の者）たちは次の諸役を勤めた。

頭事、六尺、米フレ、米取り、糀取り、くゑ切（三名）、カヤ切（三名）、酒蔵作り（十一名）、買物行（二名）、石竹行（石武は神主の住居の所在地。神主の装束その他を取りに行く役）、御客取持、帳方、板本、同小夫（二名）、宮夫（四名）、酒蔵小夫、酒わかし。

頭事とは杜氏のことで、オヤジともよばれ、甘酒と神饌とを謹調する重要な役目である。したがつて部落でも家柄の良い年長者が選ばれ、必らずしも酒つくりの巧拙は問わない。別に経験者を一人、助手として添える。この役がロクシャク（六尺）で、クラコともよばれ、希望者の中から選出される。「酒蔵小夫（しょうぶ）」は彼らの走り使いである。甘酒は、杜氏と六尺

の両名によつて、ザマエの家のオツボ（前庭）の一隅に建てられたサカグラの中でつくられる。蔵が建てられるのは祭の十日くらい前である。数名の「くゝ切」（杭切のなまつたものであろう。ハシラキリとも云う）が部落の共有林から伐つてきた長さ八尺の柱と、「カヤ切」の切つてきた萱を材料として、「酒蔵作り」（「小屋だて」ともいう）の人々が建てるのである。酒蔵建てに先立つて、シショウ（祀掌）の不浄ばらいが行われることは云うまでもない。九尺二間、堀立小屋の酒蔵は、正面にシメが張られ、内部の土間には酒桶とユルリ（イロリ）があり、一隅にはザを設けて、竹床の上に藁を敷き、さらにその上に青莚が敷かれている。むかしは小屋建てと同時に杜氏と六尺がこゝにこもつて甘酒をつくり、小鍋・食器等を持ちこんで別火の忌を守つたそうであるが、今は家から通つて甘酒をつくり、こもるのはヨド（宵祭）の日の朝からというように略式になつてしまつた。それでも、この期間は、ミゴエ（下肥）や女に触れることを慎み、クラには余人を絶対に入れない。酒蔵は来年、レーツー（来頭。来年のザマエ）の家に新蔵が建てられ、桶をその方へ移すまで、そのまゝにしておくが、「むかし蔵の壁にイマキ（ユマキ）をほしたところ、翌年の祭の時の甘酒が血色になつたことがある」、というので、家人も蔵を粗末にしない。酒米は、「米フレ」が予め部落中に米の徴収をふれて廻り、二、三日後に「米取り」が取立てて歩く。この両役を一人ですますこともある。糀の購入費は杜氏の負担で、「糀取り」役が由布院まで出かけた。

ヨド（宵祭）には夕方から氏子たちがお宮に参集してオツヤをする。但しザマエだけは夜半に自宅に帰ることになつている。境内では夜を徹して、かがり火がたかれるが、これについては、「むかし千代ノ大夫という人が霧島さまのお供をして塚原に来た時、当地には鬼がいて大いに悩まされた。そこで大夫は一計を案じ、鬼をおどすために夜どおし火をたいた。今のかがり火たきは、これに因むのである」という伝えがある。

翌日、神官による神事が一応終ると、若い衆二人の打ちならす太鼓を合図に、ザマエの家の酒蔵にこもつていた杜氏とロクシヤクは、お宮へ行く。杜氏は甘酒の素を入れた桶を捧持し、鉢巻をしめたロクシヤクは甘酒桶をロクシヤク（六尺棒）で担つて行く。甘酒を神前に供え、参列者一同にもいただかせる。終ると、寄子の中から選ばれた囃子方の太鼓・トンビヨウシ（鉦）・笛を先頭に、杜氏・ロクシヤク・神官・氏子等の行列がザマエの家に向う。途中、茶碗を持つて待ちかまえる老若男女に、ロクシヤクが桶の甘酒をいただかせる。

この間に、ザマエの家では、「帳方」の指揮によつて繕部の準備が整えられている。帳方はスーマンともよばれ、食料の調達や、不足膳椀の借入れ、当日の料理・配膳等、まかない一切について、「買物行」や「板もと」・「配膳人」・「酒わかし」（カンカタ）等に采配を振る役である。まかないに女を一切関与させないことは云うまでもない。費用は、若干残つている旧宮田の基金の一部と、組ごとに積立てられた基金とによつて、まかなわれる。二ノ膳だけはザマエの負担ということになつている。

行列が着くと、やがてナオライが始まる。神官と並んで、ウケ組の寄子中の最長老が「お客とりもち」役として最上席に着き、続いて帳方・ロクシヤク以下一般氏子等が紋服に威儀を正して居並ぶ。むかしはフデー（譜代の下人）やナゴニン（年限奉公人）等は参会できなかつたという。キユウテイニンともよばれる「お客とりもち」が、ザマエに代つて挨拶し、一同お神酒をいただく。給仕人は、これも紋服姿の若い衆である。杜氏は直会の間は酒蔵にこもつているので、ここには特別の本膳が据えられる。お神酒が一通りまわつて直会が終ると、レーツーワタシ（来頭渡し）に移る。ここで新ザマエ（来頭）迎えの使者が立つが、「七ヘン半のムカエ」といつて、新ザマエは七度目の迎えぐらいでやつと腰をあげ、八度目の使者と途中で出会うくらいに威厳をつけて出席する。神官の立会のもとに、新旧ザマエがお神酒と甘酒をいたゞき、「例通帳」（来頭帳）その他の宮座記録をおさめたレーツー箱の授受が行なわれる。宮田のあつた頃には種籾も渡された（これらは年中ザマエの家の座敷の床ノ間に安置しておく）。また旧ザマエの提供するレーツー鯛（焼鯛）を新ザマエの前に供え、お給仕人が箸で一挟みずゝ新ザマエを始め一同にいただかせる。串ざしの焼豆腐に味噌をつけたものも配られるが、これは火防ぎのまじないになるといわれる。新ザマエには山盛りの飯を無理強いする。レーツー渡しが終ると、羽織袴をぬいで無礼講の酒宴となる。前の晩のヨドに始つた甘酒祭はこの酒宴で終り、それまでにお宮の方も数人の「宮夫（みやぶ）」によつてムシロアゲ（あとかたづけ）がすんでいるが、翌日は、ザマエがウケ組の主婦全員を招待して、イタジキバライをする。「男ンジョー出て飲んヂ、スマンキー」という気持から、そうするのだという。直会の残りものに、ザマエの出す若干の料理を加えたさゝやかな膳ではあるが、酒や甘酒がふんだんに出されるので、オナゴシもオトコシを給仕人として、なかなかの怪気炎をあげる。